

つながり

5年 H.K

東日本大震災から3年が経って私は初めて被災地を訪れました。訪れて最初に感じたのは復興が思ったより進んでいないということでした。三年も経ったのに、現地は復興というより本当にただただ辺りに物が無いという感じでした。しかし、以前訪れたことのある先輩は夏よりずいぶん進んだ、とおっしゃっていました。その言葉も私にとっては不思議でした。これだけ物がなく地震が来る前どのような町であったか全く想像できない様子にも関わらず、進んだと言うのだと。それだけ、震災がもたらした被害は大きかったのかと考えさせられました。

バスに乗ってしばらくはそのような、あまり震災の被害は感じられない町並みでした。しかし、防災庁舎に着いた時本当にここで地震があったのだと強く思い知らされました。防災庁舎はニュースや新聞の写真で何度も見ていたはずなのに初めて見た気がしました。その場所の空気や目の前に広がる防災庁舎は本物なのだと、その時分かりました。固い鉄の階段の手すりがまるで粘土のように簡単に曲がっていて、津波は怖い、恐ろしいとかそんな簡単な言葉では済まされないものなのだと思います。私たちが黙祷をささげ、防災庁舎のお話を聞いているとき地元の人も訪れ、防災庁舎の前で手を合わせていました。それを見たとき何とも言えない感情に襲われました。私たちは第三者として今防災庁舎の前に立ってその日の悲劇を想像してショックを受けているけどそれはあくまでも想像で、その手を合わせていた人には現実なのだ、と思うと本当にそこにいるのが辛かったです。

そして私は防災庁舎を取り壊すかどうか話し合っているのだと聞いて残すべきだと強く思いました。被災地に訪れて、それまでここで本当に地震が起きて津波が襲ったのだと実感が湧かないなかで防災庁舎は初めて自分にその現実を突きつけました。また、私は被災地を訪れる少し前にヒロシマ平和の旅に参加したこともあって、防災庁舎を見てお話を聞いた時広島のことを思い出しました。ちょうど原爆ドームの前で似たお話を聞いたからです。戦後原爆ドームを残すか残さないか論議したと。現地の人を見ると思い出して辛いからすぐにでも取り壊してほしいと。しかし結果的に残ったおかげで戦争から何十年も経っているにも関わらず今の私たちが原爆ドームを通して核兵器の恐ろしさを学ぶことができました。だから、被災地で起きたことを忘れないためにも防災庁舎は残すべきだと思います。

そう思った時の私はその意見に確信を持っていました。しかしこれは後日のお話ですが、訪問三日目に寄木に住んでいる方にお話を伺う機会がありました。そこで防災庁舎のお話をお聞きしたときに、涙ながらに、あれは見たくない、見ると思い出して辛いから、と声を震わせておっしゃるのを前にして私は自分の意見がどんなに残酷なのかと思いました。確かに防災庁舎は津波の恐ろしさを後世に伝えていくにはとても重要だけれど、そのために私はこの目の前にいらっしゃる被災地の方に、私たちのために我慢してくださいだなんて絶対に言えないと思いました。しかし、やはり防災庁舎を取り壊してしまうのもいけない気がして私の中で葛藤して未だに私の答えは出ていません。こういう風に悩めるのも実際に来てすぐ隣でお話を聞いて、この方を悲しませたくないと思えるようになったからだと思います。そういう意味でもやはりこうやって現地に足を運ぶのがいかに重要か気づきました。

また、夜に行われた分かち合いを通して復興の意味も考えるようになりました。今年の

三月は震災から三年が経ったこともあり、被災地の復興が進んでいると特別番組が組まれています。本当の意味での復興とは何なのだろうと考えさせられました。復興とは私たちが普段帰るような家に帰り、そこで温かいご飯をたべてられる、という当たり前のようなことや以前の街並みに戻ることだと考えました。しかし、高橋さんは、復興とは金銭的、精神的に震災前の状態に戻ることに聞いて、私たちはそこに住む人々の心よりも目で見えるような形にとらわれてしまっているのだと気づかされました。

私のこの三日間の感想を言うならば、まず初めに言いたいのは、本当に楽しかったということです。これだけ聞いたら不謹慎に思うかもしれませんが。被災地に遊びに行っているわけではないのに楽しかった、だなんてふざけていると。しかし、本当に楽しかったのです。何よりも楽しかったのは現地の人とお話をして、作業を手伝って、一緒に楽しく美味しいごはんを食べたことです。少し緊張して不安だった気持ちを一瞬のうちに一言で吹き飛ばしてくれた高橋さんご夫婦には感謝しかありません。「おう!元気かい!?こんにちは!」と言ってパワフルに元気に声をかけながらバスに乗ってきた高橋さんご夫婦に私は最初あっけにとられていました。同時にそれまでの緊張はどっかに飛んで消えてなくなりました。それから、本当に何度も私達を笑わしてくれて、本当にお話を聞くのが楽しかったです。二日目の朝もその元気さで私達を元気づけてくれて分かれて行く作業も本当に楽しみに行きました。作業しながら、震災のお話を伺ったところ、嫌な顔もせずたくさん話してくださいました。そこで私に衝撃的だった話は震災当日のお話でした。

当日、周りの大人、子供でさえも泣いたり騒いだりするのではなく、ただあっけにとられて呆然と立っていたと。その話はとても印象深いものでした。子供までも泣き騒がない、それほど津波は恐ろしく現実離れしていたのか、と思いました。また、防潮堤に関しては「海が見えなくなる方が怖い。しかも 8.7 メートルもの防潮堤を作ったところでそれを乗り越える波はあの日なら簡単に来る。それに乗り越えて入った海水は逆に海に戻らなくなるじゃないか。」とおっしゃっていました。防潮堤を超えて入った波が海に戻らなくなったらどんな大変なことになるか、そのお話を聞いて初めて考えさせられました。また、海が見えなくなる方が怖いというのも本当にその通りでした。高橋さんがお話してくれたお話でも、「その日津波が見えていた人は助かった人もいたが、見えずに津波にのまれた人は何もできないまま流されるしかなかった。」という話をしてくださいました。それらのお話を通して、分かりづらかった防潮堤の問題点がとても分かりやすくなりました。

このように、震災のお話をしながらもワカメのお話や町で流れる時報のお話など、本当に楽しく笑いながら作業ができました。その日とても嬉しかったことは千葉さんが「こうやって作業した次の日に朝町の人と会ったりすると、自分の所に手伝いに来てくれて子供が良かったと自慢しあうんだよ」と言ってくださったことでした。私達も同じで、お昼に一回休憩が入って皆とあった時、自分たちが手伝いに行った人は素敵だと自慢していました。このような現地の人とのつながりがとても嬉しいものでした。

私は被災地を訪れる前本当に自分が力になれるか、とか帰って結局日常に戻ってしまうのではないかと考えていましたがそんなことは悩む必要がないくらい充実した三日間でした。歓迎されるばかりで自分が本当に力になれたかどうかは怪しいところですが、被災地に訪れなければ、考えることの出来なかった事、会うことの出来なかった人、過ごすことの出来なかったかけがえのない時間を手にすることができました。被災地の方々、高橋

さんご夫婦や千葉さん、お世話になった多くの人に何ができるかの、どの様な力になれるかの、と心から何かをしたい、続けたい気持ちになれたことは、今回の被災地訪問プロジェクトで一番大きなことだと思います。隣に寄り添って、支えていけるような活動を、これからも皆で考えてこのつながりを大切にしていきたいと思っています。